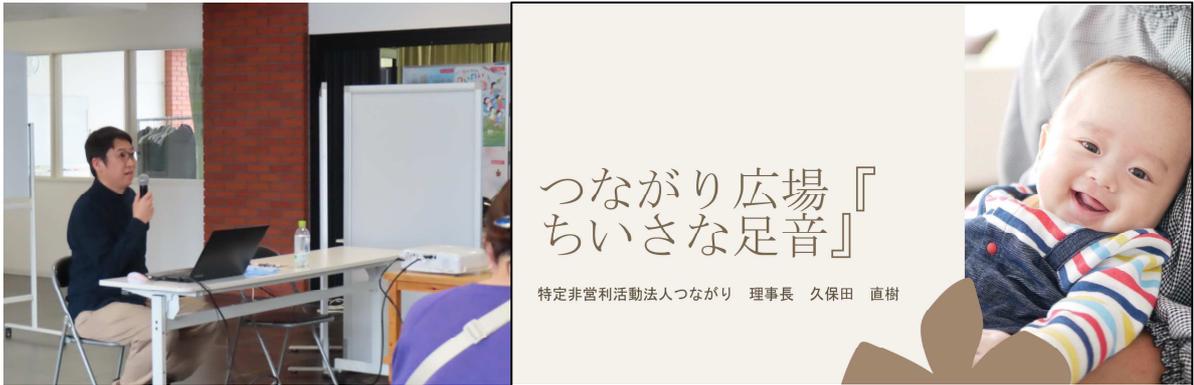


令和8年度 協働のまちづくり活動支援事業公開選考会

<事業内容・質疑応答>

1. 特定非営利活動法人つながり



◆事業内容

0歳～2歳の子どもの持つ親子を対象に親子が気軽に集い、子育てに関する講話や親子のふれあい遊びを通して、交流し、つながりを育める場を提供する。それにより子育ての喜びや悩みを共有し安心感のある交流の場を目指す。

【団体の紹介】

- ・設立：令和5年4月3日
- ・「子どもたちの明るい未来のために」を合言葉に、親同士が支え合い、つながり合える場を育てている。
- ・「子どもの幸せは、まず親の幸せから」と考え、特にママが笑顔でいられることが家庭の温かさにつながると信じ、ママ同士のつながりづくりをメインに活動。親が笑顔になれば、子どもも自然と笑顔になると考えている。

<今年度の事業>

- ・「ママの夜会」
- ・ファミリーキャンプ
- ・親子パン教室
- ・母の日イベント
- ・田んぼ活動 など

【応募事業：つながり広場「ちいさな足音」】

- ・立ち上げるきっかけ

「ママの夜会」での気づき

「お父さんたちが子どもたちを巻き込みながら料理を作り、食後は学生が子どもたちと遊び、ママたちはゆっくりご飯を食べながら集うという会で、年齢に関係なく集える場として開催してきた。毎回すぐに定員に達するほど多くの参加がある。」

・開催している中で感じた課題を形に

子どもたちが走り回って遊ぶことも多く、赤ちゃんを連れて安心して参加できる場ではないかもしれないと感じるようになった。

事例

1歳くらいのお子さんを連れてこられたママが、周囲の雰囲気不安そうな表情をされ、その後来られなくなったこともあった。

⇒**赤ちゃんと一緒に心から安心できる別の居場所が必要**だと強く感じた。

つながり広場「ちいさな足音」：0歳から2歳を対象にした集いの場

赤ちゃんと一緒に外に出て、話して、遊んで、食べて、同じ時間を過ごす場所

初めてでも、泣いても、途中で抜けても大丈夫という、親子がほっと集え、安心できる場所を作りたい

【立ち上げ理由】

①1人目が生まれてからの不安

私自身も父親であるが、病院ではおむつ交換の仕方など生きるための方法は教えてもらえるものの、どのように育てていけばよいかという家庭ごとの考え方までは教えてもらえない。自分たちで考えなければならず、漠然とした不安があった。母親は病院で教わって帰ってくるため、私も母親に聞かないと動けず、結果として母親の負担が大きくなり、父親以上に不安だったのではないかと考えている。

②1歳からの職場復帰、生活の変化とイヤイヤ期

妻も育休中は子育て支援センターに行き、ママ友を作ったり相談したりする場があったが、1歳になり職場復帰するとそのような場に行けなくなる。子どもが熱を出して頻繁に休むようになると、職場に迷惑をかけてはいけないという気持ちの中で生活が変化し、さらにイヤイヤ期も重なる。1歳になると、なかなかそうした場に出ていけないことに気づいた。

③不安な時期につながったママと今もつながっている

妻も0歳の時に子育て支援センターでつながったママと今でもつながりがあり、相談したり一緒にキャンプに行ったりしている。不安な中でつながったママ同士には強い絆があり、分かち合える部分が大きかったのだと思う。その時期に出会えることの大さを実感している。

・居場所の名称「ちいさな足音」に込めた想いと願い

足音は一瞬で消えるもの。泣いたり、笑ったり、歩いたりする子どもとの時間はほんの一瞬である。私自身の上の子も5年生になり、なかなかかまってもらえなくなった。成長は嬉しいが少し寂しさもある。だからこそ、今しかない時間を大切にほしいという思いで名付けた。また、この場を通じてママ同士がつながってほしいと願っている。

・開催概要

対象

0歳から2歳までの子どもとママ。パパやお兄ちゃん、お姉ちゃんなど家族での参加も歓迎

日程（予定）

年3回、土日祝の10時から13時頃

＜開催予定と時間帯の設定理由＞

- ・もっと多く開催したいが、本業もあるため初年度はできる範囲での回数
- ・赤ちゃんは午前中が活動的であり、働くママにも来てほしいため、土日祝の午前中に設定。

参加費

1家族500円

場所

大麻西地区センターの和室1・2

内容

- ・子育て講話と親子ふれあい遊び 一般社団法人ぴんぽんはーと 代表理事 魚岸あや子氏
魚岸氏は訪問保育や子育て講話などを日頃から行っている方。しかし、それだけで帰るのではつながりを作りにくいいため、当法人で昼食を準備し、ゆっくり過ごしてもらおう。
食事の間にママ同士の交流や子育て相談タイムを設ける。離乳食の準備はハードルが高いため、最初は各自で持参してもらおう。

運営

メインスタッフ：魚岸氏を含めて4名。保育士、理学療法士、社会福祉士を配置

【予算】

収入

- ・自己資金 87,040円
- ・参加費 1家族500円:10家族が3回参加する計算で計上
※実際には最初は3～5家族程度を想定

支出 計：102,040円

- ・消耗品費 以下購入予定品
収納ボックス、調理消耗品、ベビーチェア、赤ちゃん用の食事道具、パーティション、おむつ替えシート、プレイマット、カーペット
- ・使用料、賃借料
大麻西地区センター和室1・2の午前・午後の使用料
- ・印刷製本費
各回100枚ずつ地域に貼るためのチラシ代

◆ 質疑応答

【選考委員 A】

市の支援センターがある中で、あえて自分たちで事業を立ち上げようとした理由について、家族や兄弟も参加できる点が大きな違いだと感じた。また、「ママの夜会」などの活動を通じて、ママだけでなくお父さん同士や子ども同士のつながりもできているように見受けられる。そのあたりの具体的な状況を教えてほしい。さらに、今後より大きな活動にしていくために、江別市内で子どもたちと関わっている他の団体とのつながりも作っていくと良いのではないかと感じた。

【プレゼンター】

当法人は全体として、様々な事業を通じてママ同士のつながりづくりを行っている。今回はそれに加えて、赤ちゃんがほっと集える場を作り、色々な場所に参加してほしいという思いから新規事業として立ち上げた。

「ママの夜会」には多くの方に参加していただいております。同年代の子どもを持つ親同士で共感できる部分も大きいため、この事業を通じてもつながりを作ってほしいと考えている。

今後は、毎月やりたいという希望もあるが、母親たちの意見を聞きながら、私自身無理のない範囲で活動を広げていきたい。

【選考委員 A】

集まった人の中でつながりが出来ているのが伝わってきたが、地域とのつながりということでは他の子どもと関わる団体とのつながりも作り、もっと大きな活動につなげてほしい。

【選考委員 B】

0歳から2歳という短い期間の親子に対するケアとして、素晴らしい取り組みである。参加した人が楽しかったからまた来たいと思った際、参加者の情報をどのように把握し、継続的な参加につなげようとしているのか伺いたい。

【プレゼンター】

申込み時点では、母親と子どもの名前のみを把握している。その他の詳細な情報は、参加していただいた際の会話の中で聞いていく形をとっている。細かい住所などの個人情報を集めることはせず、プライバシーに配慮しながら気軽に参加できる場にしたいと考えている。

【選考委員 C】

まず1点目は、参加を10家族に限定しているが、3回開催する中で先着順とするのか。それとも、より多くの人に来てもらうため、初めての人を優先するなどの工夫をするのか。

2点目は、今後の展開についてである。田んぼ活動などもされているが、子どもが成長していく過程に合わせて対象を広げていくのか、あくまで孤立しがちな0歳から2歳の母親に焦点を当てていくのか教えてほしい。

【プレゼンター】

まず1点目について、10家族に限定しているのは会場の広さの都合である。最大でも12から13家族が限界だと考えている。基本的には先着順とするが、顔を合わせる回数が増えることでつながりも生まれるため、状況にもよるが、リピーターを拒むことはしない。できるだけ江別市民の方に多く来てほしいので、まずは市内にチラシを貼り、その後にSNSで周知するという順番で進める予定である。

次に2点目の対象年齢について、子どもが成長して中学生や高校生になれば新たな課題が見えてくると思う。しかし、私自身が現在小学5年生の子どもを育てている段階であり、それ以上の年代の困りごとはまだ把握しきれていない。そのため、現時点では小学生以下の子どもたちをメインに支援していきたいと考えている。

【観覧者】

大麻西地区は最近住み替えが多く、小さな子どもがいる家庭が増えているため、大麻西地区センターでの開催は非常に歓迎したい。

質問だが、これまで大麻地区のイベントは東側で開催されることが多かった中で、今回あえて大麻西地区センターを選んだ理由と、次の展望について教えてほしい。また、周知の際には第3住区の自治会連合会などを活用し、回覧板で町内に知らせるのも良いと思うがいかがか。

【プレゼンター】

まず、大麻西地区センターを選んだ理由は、単純に私の自宅から近く、荷物の運搬などが楽だからである。

次に今後の展望としては、まずはスタートさせることが重要だと考えている。無理のない範囲で年3回の開催から始め、細く長く続けていきたい。

最後に、周知方法についてのご提案は大変ありがたい。ぜひ自治会などのネットワークを活用させていただきたいので、ご協力をお願いしたい。

2. こども支援ワーカーズみんなのいえ



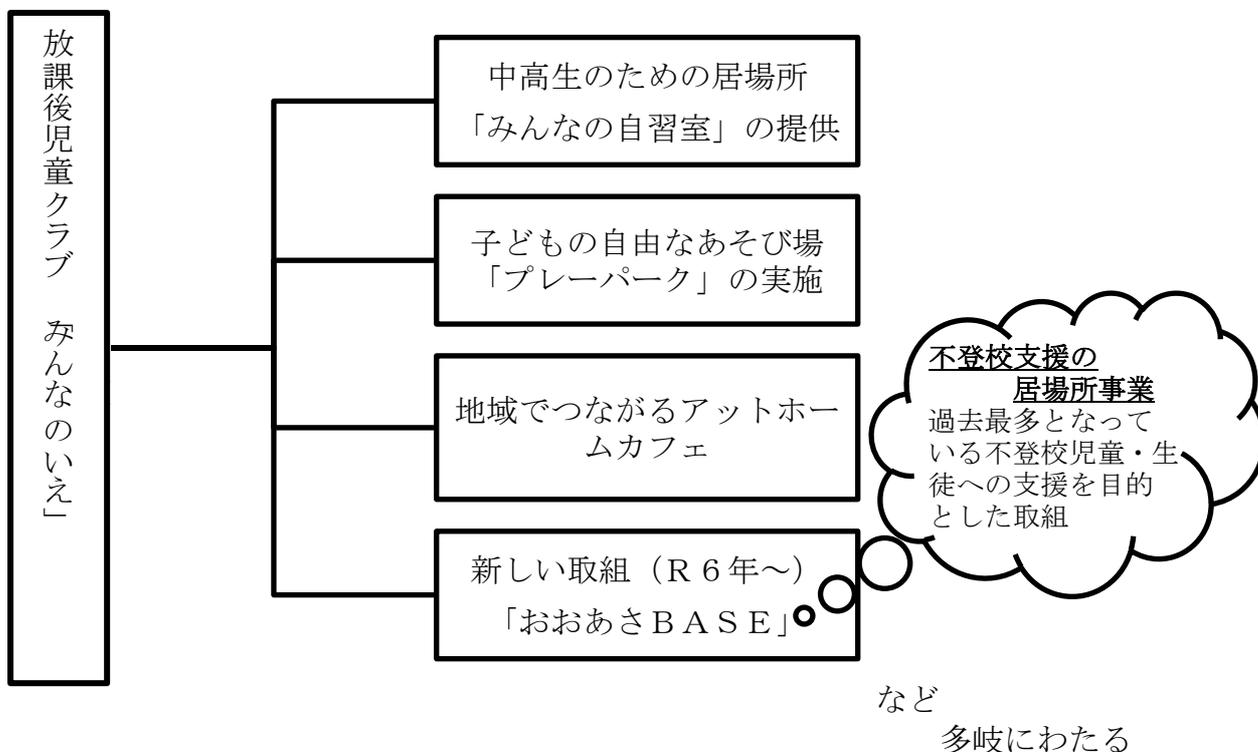
◆事業内容

今年度、大森銀座商店街の火災のため、「おおあさBASE」が全焼、不登校児の居場所であるおおあさBASEが再興し、大森銀座商店街の各所で行うことで、商店街全体が子どもたちの居場所となり、銀座商店街の人々との交流を深める。

【団体の紹介】

・設立：7年前

<主な事業>



【不登校の現状と新たな居場所づくり】

私たちは子どもを相手とする団体であるため、現在、子どもがおかれている状況を非常に近くで感じている。自分たちの子どもの世代もそうであったが、現在は不登校の子どもが非常に多いという話をス

タッフの中でも共有している。

<不登校（小中学生）に関する最近のデータ>

- ・全国 35万人
- ・江別市 305人（前年度より10名減少）

そうした中で

⇒子どもたちの居場所は本当にあるのだろうか

↳教育支援センター「ねくすと」野幌、各中学校に登校支援室（令和5年10月から設置）
フリースクール（定期開催しているものは江別市内にはない状態）

⇒**子ども本人にとっても保護者にとっても居場所となるようなところがあったら良い**

「おおあさBASE」という居場所支援を2年前から開催

【おおあさBASE】

- ・大麻銀座商店街にある学童保育施設である「みんなのいえ」を活用
- ・2年前より週1回火曜日に開催
- ・関連事業

初年度（令和6年度）：西野博之氏の講演会

昨年度（令和7年度）：商店街の店舗の方を講師に招いて交流企画を実施

参加者は延べ150名を超えている。子どもたちが安心して自由に過ごせる地域の居場所として存在し続けることの意味を、この2年間の活動を通して強く実感した。

【運営している中での課題】

- ・学童施設を利用しているため、午後の時間はどうしても利用できない
- ・長期休み中も子どもが朝から晩までいるため、不登校支援のために場所を使うことができなかった。
- ・いつでも子どもたちが来られる場所を作りたいと考え、昨年（令和7年）秋に「みんなのいえ」の向かいの空き店舗を利用して「たまりば」という施設を新たに設置し、この4月から本格的に居場所として活用していこうと準備を進めていた。

【本格始動予定の「おおあさBASE」に訪れた悲劇】

今年（令和8年）1月7日 大麻銀座商店街で火災が発生 元の学童施設「みんなのいえ」は全焼

交流企画でご協力いただいていた「花美」さん、「とりむしさかな」さんの店舗も焼失

※新たに設置した「たまりば」は焼けずに残った

【令和7年度事業として実施中の「おおあさBASE」の現状】

1月「手楽」の店舗や東地区センターの調理室を借りて味噌づくりや調理

その後は設置した「たまりば」で実施

中学生も休むことなく参加してくれた。

【悲劇を新たな力に】

思いがけない火災に見舞われたが、大麻銀座商店街のスペースを「おおあさBASE」として活用することで、子どもたちにとっても商店街自体が居場所の一つになるのではないかと改めて感じた。

居場所は学校以外にもいろいろなところにあるということ、子どもたちにも実感してほしいと思ってい

る。また、子どもたちとの交流が商店街の力になることも期待している。

・継続講師

「花美」さんや「とりむしさかな」さん

・新規講師、企画

隣の「S U N A B A C O」さんでのパソコン体験や、「ブックシェアリング」さんによる本を用いた企画など

⇒地域の方々との交流を深めながら、「おおあさB A S E」の再構築をしていきたい。

【予算】

収入

・自己資金 15,000円

支出：計150,000円

・委託料

講師の方々をお願いするため

・食糧費

スタッフが講師となって行うパン作りや味噌作りの材料費

・印刷製本費

チラシなどの印刷代

・消耗品費

お茶代や子どもたちと一緒に使うボードゲームのほか、問題集の購入

声を反映：中学生の中には勉強をしたいという子もおり、学校の問題集は授業を受けることを前提としているため、要点がまとまっていなかったりして使いづらいという指摘があった。
⇒本屋で販売されているような学び直しのための問題集が非常に良い！

◆ 質疑応答

【選考委員A】

不登校児が増えている現状は全国的な課題であり、こうした居場所づくりが盛んになっている。不登校になった子どもたちが最終的に学校へ戻れるようになること、またそれ以外の居場所があることも重要である。正解がわからない中で、この活動をより多くの人に知ってもらい、教育や子どもの環境について考えるきっかけにしてほしいと思う。現在の活動は大塚銀座商店街が中心だが、今後はさらに他の団体や地域と連携を広げていく考えはあるか。

【プレゼンター】

現状では大きな展開は考えていない。まずは子どもたちに地域に多様な大人がいることを知ってもらうこと、そして、人が苦手な子どももいるため、身近な大人との交流を深めることから始めたいと考えている。商店街に何度も通ううちに、外を歩けるようになっていたり、商店街の雰囲気になれたりする子どももいる。学校とは違う雰囲気の中で、花屋さんと話したり一緒に作業したりすることで、子ども同士の距離が縮まることも実感している。そのため、まずは子どもたちの状態に合わせながら、現在の商店街の店舗と連携した活動を継続していきたい。

【選考委員 B】

不登校の子どもたちにとって居場所は大切だが、本質的にはできるだけ早く学校に戻れるようにすることが最も重要ではないか。この活動において、子どもたちのケアを通じて学校復帰を促すような支援をどのように考えているのか伺いたい。

【プレゼンター】

私たちは、子どもたちを学校に戻すことを目的とした活動とは考えていない。家を一步も出られない子どももあり、そうした子どもの保護者も仕事に行けず生活に困窮している状況がある。そのため、まずは地域の中に安心できる場を作ることが一番大切だと考えている。

実際に「おおあさ B A S E」に来ている中学生の保護者からは、「娘が同じ年代の子どもと話しているのを久しぶりに見た」という声も寄せられている。そうした小さな一歩から少しずつ社会に出ていけるきっかけを作ることが重要である。

学校は大切な場であるが、無理に行かせようとして命を失う子どももいるため、「学校がすべてではない」と伝えることも必要である。学校に行かなくても良いと言っているわけではなく、まずは今の状況を受け入れ、外に出て何か楽しいことをしようというきっかけづくりをしている。勉強したい子どもや、学習支援のボランティアと話す子どももいるため、そうした活動を通じて子どもたちをサポートしていきたい。

【選考委員 C】

一点確認したい。昨年度、みんなのいえの向かいの店舗に「たまりば」を開設し、今年度から中高生の居場所として本格始動するとあるが、その「たまりば」が今回の事業の拠点となるのか。

【プレゼンター】

「たまりば」は元々、不登校の子どもたちの居場所を目的としてスタッフの発案で開設したものである。しかし、火災により学童保育の拠点であった「みんなのいえ」が全焼してしまった。現在 70 人以上の子どもたちが学童保育を利用しており、保護者も仕事をしている中で、子どもたちの居場所がなくなってしまった。そのため、急遽「たまりば」を学童保育の拠点として戻すことになり、「たまりば」で予定していた「おおあさ B A S E」の活動も時間を調整しながら実施しているのが現状である。

【観覧者】

「おおあさ B A S E」が開設された時は非常に良いものができたと思っていたところに、今回の火災があり大変残念に思う。ぜひ再構築に向けて頑張ってください。別な形で商店街の対策支援にも協力しているので、そうした意味でも応援していきたい。